

介護老人福祉施設入所による生活環境変化に適応するための要因 — 後期高齢者のインタビュー調査より —

Elderly Adjusting to the Living Environment in Special Nursing Homes
— The Elderly Were Interviewed —

田原 育恵¹⁾*, 堀内 美由紀¹⁾, 安田 千寿¹⁾, 筒井 裕子¹⁾, 太田 節子¹⁾
Ikue Tahara, Miyuki Horiuchi, Chizu Yasuda, Sachiko Tsutsui, Setsuko Ota

キーワード 後期高齢者, 介護老人福祉施設, 環境変化, 生活環境, 適応要因
Key Words very elderly people, special nursing homes for the elderly,
change in environment, living environment, the factors of adaptation

抄 録

背景 近年, 要介護状態の後期高齢者は急増し, 施設利用を自ら選択する意向もみられる。しかし 高齢者にとって施設入所による環境変化は, 重大なリスクにつながる。

目的 介護老人福祉施設入所による後期高齢者の生活環境変化に適応するための要因を明らかにする。

方法 同意が得られた介護老人福祉施設に入所8カ月の94歳の対象Cさんに, インタビュー調査を行った。そして逐語録を作成した後, KJ法の手法を用いて質的に分析した。

結果・考察 KJ法の結果66個のラベルが取り出され, ラベルは20個の島に分類された。またこれらの島から11個の表札を抽出した。これらの分析より, 生活環境への適応状態には【生活の知恵や判断力に基づいて対処行動がとれる】【自分の居場所が決められる】【職員のケアが適切である】【静かで自然を感じる環境がある】【家族が支えになっている】の5つの要因が関連していることが明らかになった。

結論 介護老人福祉施設入所による後期高齢者の生活環境への適応状態を質的に分析した結果, 5つの適応要因の関連が明らかになった。

Abstract

Background As the aging of society progresses rapidly in Japan, the number of elderly with care needs is rising sharply. Yet, living in a facility brings about a change in environment, which can have serious risks for the elderly.

Objective The purpose of this study was to reveal the status of adapting to the living environment among the very elderly in special nursing homes.

Methods The 94-year-old woman living at a special nursing home for the elderly in Prefecture A for 8 months was interviewed after providing consent to participate. Verbatim transcripts of the interview were made, and the content was qualitatively analyzed using the KJ method.

Results/Discussion The total of 66 labels were extracted from the analysis, and the labels were classified into 20 islands. From these islands, 11 nameplates were extracted. The analysis revealed that the 94-year-old woman had adapted to her living environment, and this adaptation was correlated with the following five factors: “can adopt coping behavior based on wisdom regarding living and judgment,” “can make decisions about where to live,” “care provided is appropriate,” “presence of a natural environment in which one can live at peace and quiet,” and “family is a source of support.”

Conclusions We analyzed using the KJ method adaptation to the living environment among the very elderly in special nursing homes. The 94-year-old woman had adapted to her living environment, and this adaptation was correlated with the five factors.

I. 緒 言

急激な高齢化が進むわが国では, 高齢期における医療・介護は社会的な問題となっている。2010年現在, わが国の高齢者世帯構成は高齢者夫婦世

帯と単独世帯が半数を超え, 今後さらに後期高齢者が増えることが見込まれている(高齢者社会白書, 2012)。そして団塊の世代は現在の高齢者との意識が異なり, 個人重視の価値観や福祉サービスの受給者としての権利意識を持った新しい高齢

¹⁾ 聖泉大学 看護学部 School of Nursing, Seisen University

*E-mail : tahara-i@seisen.ac.jp

者像が想定される（佐々木，2005）．このような状況において要介護者の住まいや家族介護に対する意識は多様化しており，介護を受ける場所として自宅以外にも施設や病院を選択する意向が示されている（内閣府施策統括官，2003）．しかし施設入所を選択した場合の環境変化が，高齢者にとって重大なリスクとなる場合がある．

この環境変化に対する適応は，Lawtonらの環境適応能力と環境圧の理論で説明されている．この理論における環境適応能力とは健康と感覚機能・認知能力・自我の強さなどを示し，また環境圧とは特定の環境化で個人に求められる行動の要求の程度を示す．そしてこの環境適応能力と環境圧との相互の関係から，環境変化に対する適応が進む（佐々木，2004）．しかし施設に入所する後期高齢者の多くは，健康や認知能力の低下が認められており，環境への適応能力は低くなることが予測される．特に認知症のある人は，環境変化によってストレスや精神的ダメージ（以後，リロケーションダメージと示す）を受けやすく，これにより認知症のさらなる進行や混乱を引き起こすと考えられており，認知症予防や認知症ケアは重要課題となっている．つまり環境への適応能力が低い高齢者にとって，適応できる環境は限られたものであり（佐々木，2004），不適応を起こすリスクが高くなることを意味している．

老年期の適応に関しては，コーピング理論（任和子，2008）や4つの健康モデル（Sumith，1997）の中で適応モデルが示されている．そして老年期の発達課題（Havighurst，1943；Erikson，1963）を解決し，また老年期だけでなく中年期からの変化もとらえ（西村，1984；高橋，波多野，1990）適応していくことによってサクセスフルエイジングに至るなど多くの知見が示されている．さらに老年期の適応要因に関する研究では，個人のパーソナリティが大きく影響しており「生存・健康・満足度・幸福度」の要因が関係していると述べられている（palmore，1990）．また日本における比較的健康状態の良好な高齢者を対象とした幸福感の調査からみた適応構造の研究では，「活動能力・心理的年齢・自己の統合・生活満足度」という概念が有意に関連したと報告されている（黒田，2005）．しかし実証的研究は少なく，現在の日本の後期高齢者に適しているかは明らかとはいえない．

施設入所に伴う高齢者のリロケーションダメージを軽減するケアに関する研究は多くされており，なじみの生活（環境・関係・暮らし方）の継続やよい感情を引き起こすきっかけとなる思い出の品が有効であることが報告されている（丸山ら，2010；五島，2008；Brooker，2007）．しかしながら，これらは高齢者の日常生活行動を観察した客観的な情報を調査した実践報告が多く，多様な生活歴・価値観を持つ当事者が環境変化をどのようにとらえているのか当事者視点からの研究報告はほとんどみられない．一方介護老人福祉施設の後期高齢者を対象とした研究では，現在の生活に対して，「家族と一緒に暮らしたいが家族のお荷物にはなりたくない」という自己の欲求と家族への気遣い，「施設生活に対し施設生活ならではの安心感があるが受け身でしかない施設の生活は意に沿わない」と相反する思いなどを抱きながら生活しており，その思いを念頭に置いた現実の意味づけへの関わりが重要であることと示されている（藤巻，2007）．これらより施設入所している後期高齢者は本心を抑えながら現実の生活と向き合っていることが推察できるが，入所による環境変化への適応は明らかではない．

したがって不適応を起こしやすい後期高齢者の施設入所による適応要因を明らかにすることは，今後も増加が見込まれる後期高齢者の施設入所に伴う環境不適応を軽減させ安心して過ごせる生活環境の提供に役立つと考える．そこで本研究では，以上のような観点から安定した入所生活を送っている94歳の後期高齢者を対象とした．そして，介護老人福祉施設における後期高齢者の生活環境変化に適応するための要因を明らかにすることを目的とした．

Ⅱ．研究目的

介護老人福祉施設への入所による生活環境の変化に後期高齢者が適応するための要因を明らかにする．

【用語の操作的定義】

1．「生活環境」

「生活環境」とは施設の敷地内外は問わず，対象者の日常生活行動がみられる施設生活圏域の人的または物的環境と定義づけた．

2. 「適応状態」

「適応状態」とは施設入所後の生活環境の様々な刺激を受け止め、日々の暮らしを安定させようと努力し、人と自然的・社会的環境との間に好ましい関係が維持され、個人の欲求がそれらの環境と調和し、落ち着いて暮らせることができる状態と定義づけた(木島ら, 2011; 日本老年行動科学学会, 2000)。

Ⅲ. 研究方法

1. データの収集方法

1) 調査期間

調査期間は、2012年5月～10月であった。

2) 研究対象

A県B介護老人福祉施設に入所し、(1)～(4)の条件を満たし調査に同意が得られた1名の者とした。(1) 老年期は個人差が大きく環境適応に長期間を要することが多いため入所後1年以内とした(2) 体調が安定している(3) 移動動作が自立している(4) 会話による意思疎通ができる

3) 対象者の概要

対象のCさんは94歳、女性、要介護度4、認知症高齢者日常生活自立度判定基準Ⅰ～Ⅱであった。現病歴は神経因性膀胱(膀胱内留置カテーテル挿入)と糖尿病であった。移動手段は車椅子を使用し、移動は自力で可能であった。入所前は在宅で独居生活を送っており、調査時点では入所後約8か月が経過していた。近所に娘家族が在住し頻繁に面会に来ており、居室には孫・ひ孫たちの写真が飾られていた。フロアで一緒に会話する特定の入居者もあり、安定した生活状況だった。

4) 対象者の生活背景(施設概要)

A県B介護老人福祉施設は、豊かな自然に囲まれた地域において全室個室のユニットケア(2002年に制度化された事業で、少人数で個室とリビングのような共有空間を持ちながら、生活単位と介護単位を一致させたケア)を実施している。収容定員数は105名で、長期入所・短期入所・通所介護の事業を行っている。施設構造は1階平屋であり、居住スペースは6ユニットに分かれている。その他、施設内においても温かみを感じられるよう木や竹を多く使い、自然の採光を感じられるよう天窓のある通路がある。またユニットの入り口

を出ると、施設内の廊下のならびに居酒屋や銭湯の暖簾が見える。食事時になると台所から香る炊きたてのご飯の匂いがする。さらには犬と触れ合える場所や、玄関前には写真展があった。家庭と町内が感じられるような環境調整が図られていた。

5) データ収集の方法と留意点

データ収集は半構造的面接法を実施した。インタビューの項目は、(1)どこに落ち着くのか(2)物忘れで困っていること(3)不満に思うこと(4)心配に思うこと(5)その他困っていることとした。対象者の体調不良や混乱を招くなど日常生活に支障がでないよう配慮しながら、思いを自由に語れることを意識した。インタビュー内容は承諾を得て録音した。面接場所は不安や混乱を抱かせないようなじみである居室で行った。対象者の生活環境、健康状況、日常生活動作や生活スケジュールなどの基礎情報は、施設職員から情報収集を行った。

2. 分析方法

録音内容から逐語録を作成した後、対象者の自己決定・自己選択がなされる行動場面や生活環境に関する重要な場面と意味内容を逐語録から抽出した。さらにKJ法の手段を用いて研究者間で繰り返し検討し、ラベル化した。次に取り出したラベルから類似したものを分類・整理して島を抽出し、島のネーミングを付けた。そして各島の共通性を表札に表し、個人的因子と環境的因子に分類し各表札の関連図を作成した。分析過程は質的研究のスーパーバイザーとともに検討し、信頼性と妥当性を確保した。

3. 倫理的配慮

事前に施設職員から対象者およびその家族に対して、調査の目的・協力の依頼・匿名性の保持・研究目的以外に使用しない事など文書および口頭で説明してもらい、自らの自由意思に基づき本人と家族から同意書および代諾を得た。また調査当日にも、対象者にこの調査への同意を得てから録音した。なお、本研究は研究者の所属する大学の倫理委員会の承認を得て実施した。(聖泉大学倫理審査会-11)

IV. 結果

1. 分析結果

面接時間は約46分であった。面接の逐語録(6882文字)から、文脈の意味内容に基づき66枚のラベルを取りだした。そのラベルの内容が類似したものを分類・整理した結果、20個の島が抽出された。そして各島の共通性を表している表札は、11個抽出された。これらの具体的内容の結果を表1に示した。さらにその表札同士の関係性を検討し、空間配置した関係図を図1に示した。なお表札は【 】, 島は〔 〕, ラベルは「 」で示した。

1) 【時間をかけて馴染んだ新しい住まい】

この表札では「時間をかけて慣れてきた」〔自分の家と一緒に思えるようになった〕の2つの島がみられた。〔時間をかけて慣れてきた〕では、「入所時は一人ほり込まれ寂しく思った」「時間はかかるが、生活に慣れたら自分の家と一緒に」「今は慣れたから大丈夫」の3つのラベルがみられた。ここでは施設入所時により変化した心情が表現されていた。〔自分の家と一緒に思えるようになった〕では、「自分の家と一緒に」「自分の部屋は御殿と感じている」「夜、眠れる」「食事は美味しい」「不自由はない」「寂しいと思っていない」の6つのラベルがみられた。ここでは今の生活において基礎的欲求が満たされている内容がみられた。

2) 【自身の老いを受け入れる】

この表札では「年齢とともにできなくなってきた」〔年齢を重ねてもできている〕〔年齢相応のこと〕の3つの島がみられた。〔年齢とともにできなくなってきた〕では、「眼鏡の置き場を忘れる(2)」「長時間の会話は疲れる」「同じ動作を繰り返すと記憶力がなくなる」「年相応のもの忘れはある」の5つのラベルがみられた。ここでは身体的機能低下や認知機能低下を意識している内容がみられた。〔年齢を重ねてもできている〕では、「トイレはカテーテルの挿入でやる(排尿はカテーテルを挿入している)」「メガネを外しても読める」「目は見えにくいだが耳は達者、年をとっても記憶力は確か」の4つのラベルがみられた。ここでは身体的機能低下や認知機能低下はあるができていることも意識している内容がみられた。〔年齢相応のこと〕では、「自分ではボケているところまでいかないと思っている」「人さんが見たら言っていることがおかしいこともあるかもしれないが

百歳に近いし仕方がない」の2つのラベルがみられた。ここでは客観的に老いをとらえている内容がみられた。

3) 【自分の居場所が決められる】

この表札では「自分の居場所を選択し移動できる」の1つの島がみられた。この島では、「歌につかされると向こうに出る(台所)」「昼間は居室でTVを見たり、車いすを運転して思っているところに行く」の2つのラベルがみられた。ここでは日常生活における活動を自己選択や自己決定されている内容がみられた。

4) 【生活の知恵や判断力に基づいて対処行動がとれる】

この表札では「ストレス回避行動」〔楽しみを積極的にとりこむ〕の2つの島がみられた。〔ストレス回避行動〕では、「ボケないように自分のことは自分でする」「お金を持つと忘れて人のせいにするのと怖いのもたない」「人と揉めないために悪くは言うことはしない」「いらぬ事は話さないで必要なことを伝えれば快適に生活できる」「趣味があるといいとは思いますが、未だ見つからない」の5つのラベルがみられた。ここでは対人関係のトラブルを防ぐための対象行動に関する内容がみられた。〔楽しみを積極的にとりこむ〕では、「なるべくみんなとしゃべって気分転換」「リビングでみんなと話をするのが一番いいことと思っている」「昔の歌はうろ覚えだが歌える」「歌は一人でできる、歌は気持ちが晴れる」「一回で終わりすっきりする時代もののTVが好き」の5つのラベルがみられた。ここでは日常生活上の楽しみに関する内容がみられた。

5) 【個人の信念・価値観を大切にしている】

この表札では「誇りが表れている」の1つの島がみられた。この島では「病気はあるけれど楽しみはある」「同じことを何回も聞かれると苦痛である」「人と話するのが趣味」「物忘れを年のせいやと思ったらあかん」「娘のように親孝行することは報われる」「娘が袖にしたり突き放したりすることは絶対はない」「人を大事にすることはすぐには報われないがいずれは自分に返ってくる」の7つのラベルがみられた。ここではCさんの生き様や信条のような内容がみられた。

6) 【金銭管理の意識がある】

この表札では「お金の心配はしている」の1つの島に「お金の心配はしている」との1つのラベ

ルがみられた。ここでは施設生活において自分では行っていないが、一般社会の生活では必要となる金銭管理への意識がみられた。

7) 【家族が支えになっている】

この表札では〔娘の声かけが支えになっている〕〔娘の面会が頻回にある〕〔必要なものを用意してくれる娘がいる〕〔家族は離れた場所にも近い存在である〕の5つの島がみられた。〔娘の声かけが支えになっている〕では、「娘から長生きを望んでいると声をかけてもらっている」「入所することはなかなかできないと聞いている」「娘からここで気楽に生活するように言われている」の3つのラベルがみられた。ここでは家族の関わりが精神的支えとなっている内容が見られた。また〔娘の面会が頻回にある〕では、「孤独だけれど娘は来てくれる」「娘が面倒見てくれる」「娘がよくしてくれる(2)」「二日に一度の面会がある」の5つのラベルがみられた。そして〔必要なものを用意してくれる娘がいる〕では、「娘が衣服の調達をしてくれる」「好きなおやつは娘が買ってきてくれる」「娘が面会に来ておやつをもってきてくれるのが有りがたい」の3つのラベルがみられた。ここでは娘の支えによって物的環境が整えられている内容がみられた。〔家族は離れた場所にも近い存在である〕では、「いつでも家族に会えると感じている(2)」の2つのラベルがみられた。

8) 【子孫繁栄の喜びがある】

この表札では〔孫やひ孫の成長は楽しみ〕の1つの島がみられた。そしてこの島では、「大勢の孫がいて幸せ」「社会で活躍している自慢の孫がいる」「孫やひ孫がかわいい盛り」「娘・孫・ひ孫が面会に来て成長する姿が楽しみ」の4つのラベルがみられた。ここでは孫やひ孫の存在を喜ぶ内容がみられた。

9) 【職員のケアが適切である】

この表札では〔自分で職員の助けが得られる〕〔職員のケアに満足している〕の2つのラベルがみられた。〔自分で職員の助けが得られる〕では、「職員に用があれば呼び鈴を押す」「呼び鈴を使って、必要なケアを職員に伝えられる」の2つのラベルがみられた。ここでは必要なケアが受けられるよう職員を使えるとの内容が見られた。また〔職員のケアに満足している〕では、「用事が済めば職員はすぐに帰るが有り難い」「花の世話をしている職員も見ている」「職員が風や空気の調整を細や

かにしてくれる」の3つのラベルがみられた。ここでは職員のケアを観察している内容がみられた。

10) 【静かで自然を感じる環境がある】

この表札では〔生活の場は静かである〕〔周辺の自然を感じている〕の2つの島がみられた。〔生活の場は静かである〕では、「建物の音が静か」の1つのラベルがみられた。ここでは対象者の居住環境に関する内容がみられた。また〔周辺の自然を感じている〕では、「〇〇の花が咲いているのを見ている」の1つのラベルがみられた。ここでは対象者が施設周辺の自然への関心がみられた。

11) 【なじみある地域への関心】

この表札では〔地域社会とのつながりが意識できる〕の1つの島に、「ホールができ駅前がにぎやかになっている」の1つのラベルがみられた。ここでは家族が住んでいる地域に対する関心がみられた。

V. 考 察

以上の結果から、【時間をかけて馴染んだ新しい住まい】の表札はCさんの生活環境への適応状態を示しており、ここではこの適応状態に影響している適応要因とその関係性について個人的因子と環境的因子に分けて考察する(図1参照)。

1. 個人的因子から抽出された適応要因

Cさんの適応状態には、【生活の知恵や判断力に基づいて対処行動がとれる】と【自分の居場所が決められる】の2つの個人的因子から抽出された適応要因が影響していた。さらに【生活の知恵や判断力に基づいて対処行動がとれる】では、【自身の老いを受け入れる】【個人の信念・価値観を大切にしている】【金銭管理の意識がある】の3つの表札が関連していた。

1つめの適応要因として(1)【生活の知恵や判断力に基づいて対処行動がとれる】ことが日々の暮らしの安定につながったと考える。【自身の老いを受け入れている】人生経験豊かなCさんは、「いないことは話さないで必要なことを伝えれば快適に生活できる」や「お金を持つと忘れて人のせいにするので怖いので持たない」などの〔ストレス回避行動〕(任, 2008)や「なるべくみんなとしゃべって気分転換」「歌は気持ち晴れる」など〔楽しみを積極的にとりこむ〕など良好な対

人関係を維持するための対処行動が見られていた。またCさんは「歌に疲れると向こう（台所）に出る」などから分かるように、【個人の信念・価値観を大切にしている】ことや日常生活で様々な場面において「自分の居場所を選択し移動できる」との自己決定を行っていることが推察された。他者と適度な対人距離を保つことは、自己と他者の境界を明らかにし、プライバシーを守り、自己の尊厳を守ると示されている（日本老年行動科学, 2000）。このことから、車椅子を使用した自力移動能力が保持されていることによって（2）【自分の居場所が決められる】ことが2つめの適応要因と考える。

2. 環境的因子から抽出された適応要因

Cさんの適応状態には、【職員のケアが適切である】【静かで自然を感じる環境がある】【家族が支えになっている】の3つの環境的因子から抽出された適応要因が影響していた。さらに【家族が支えになっている】では、【子孫繁栄の喜びがある】【なじみある地域への関心】の2つの表札が関連していた。

まず施設における環境因子において、「呼び鈴を使って、必要なケアを職員に伝えられる」など「自分で職員の助けが得られる」（任, 2008）ように生活環境が整えられていることや、「職員が風や空気の調節を細やかにしてくれる」など（3）【職員のケアが適切である】ことが3つめの適応要因と考える。ショートステイを利用する認知症高齢者の暮らしの調査から、静寂な環境がすべての対象者に一律でよいのではなく、自宅で定常化された刺激の量や質が施設においても同様に保たれることが望ましいとの報告がある（木島, 2011）。本調査を実施した施設はユニットケアで全室個室であり、いつでも「生活の場の静けさ」を感じることができる。また生活の楽しみ・活動だけでなく、窓の外を眺めると花や田んぼが見え「周囲の自然を感じる」ことができる。このような自然との調和を感じる事ができる暮らしの継続により、「自分の家と一緒に」「夜もよく寝れる」ようになり、【時間をかけて馴染んだ新しい住まい】と認識できるようになったと思われる。ゆえに（4）【静かで自然を感じる環境がある】ことが4つめの適応要因と考える。さらにはこれらの要因によって、その時々Cさんにとって心地よい「自分の

居場所を選択し移動できる」など、Cさんが日常生活場面で自己決定できるように【職員の適切なケアがある】ことが環境圧力を減少させ（佐々木, 2004）、この相互作用によって適応しやすい生活環境に近づくとともにCさん自身の適応能力を高めたのではないかと考える。つまりCさんの状態やADLなどに応じたコミュニケーションやケアが提供され、「自分で職員の助けが得られる」「職員のケアに満足している」のような生活の主体者としての満足感（佐藤, 1998；藤川, 2000）が高まるように施設環境が整えられたことによって、適応が進んだと考える。

最後にCさんにとって（5）【家族が支えになっている】ことが5つめの適応要因と考える。近年子どもとの同居率は約4割と減少してきたが、高齢者の心の支えに子どもを挙げる人は約6割弱との報告がある（高齢社会白書, 2012）。施設への入所を選択したCさんの場合、「娘の面会が頻回にある」ことや「家族は離れた場所にも近い存在である」など家族と良好な関係性が伺える。そして居室に飾られている孫・ひ孫たちの写真があることで、いつでも孫の成長や【子孫繁栄の喜びがある】を感じられるような環境となっていた。先行文献によると、グループホームの転居による入居者の影響を観察した研究から、物的環境が変わっても人的環境が継続される場合には入居者への影響が少ないことが示唆されている（中島, 1999）。Cさんは「入所時は一人ほり込まれ寂しく思った」と、施設入所に対する戸惑いを感じていた。しかし入所後も継続された家族との関係性によって、Cさん自身が幸福感や家庭での役割を意識すること（Sumith, 1997）が健康的な生活につながり、Cさんの環境への適応能力を高めたのではないかと考える。さらには、家族が住む地域を身近に感じることによって【なじみある地域への関心】を示したのではないかと考える。つまりCさんは、なじみの地域にある施設への入所であったことや入所後も継続した家族との関係性が強みとなったと考える。そしてCさんの生活環境への適応は、家族と職員の双方からソーシャルサポートを求められる（任, 2008）ように人的環境が整えられたことが重要な要因となったと推察する。以上のことより、Cさんの生活環境への適応要因は、それぞれに相互作用があった。そして後期高齢者の介護福祉施設入所における生活環境への適応には、個人の

対処行動や自身の居場所を選択できる移動能力・自己決定を支える施設ケア環境を整える以外にも、家族関係を継続していくことが精神的な支えとして重要となる可能性が示唆された。

VI. 本研究の限界と課題

本研究の限界は、対象者の年齢や性差に対する検討ができていない事があげられる。今後の課題は、後期高齢男性を含めたインタビューの回数や事例数を重ねることで信頼性を高め、さらに認知症をもつ高齢者などの適応能力が高められる効果的なアプローチの研究を続けていきたい。

VII. 結 語

後期高齢者のCさんの介護老人福祉施設の生活環境への適応状態を質的に分析した結果、その適応状態には5つの要因が関係しており、各々に相互作用があることが明らかになった。(1)【生活の知恵や判断力に基づいて対処行動がとれる】(2)【自分の居場所が決められる】(3)【職員のケアが適切である】(4)【静かで自然を感じる環境がある】(5)【家族が支えになっている】

謝 辞

本研究を行うに当たり、ご協力いただきました対象のC様、ご家族様、および対象施設の職員様に深く感謝申し上げます。

文 献

木島輝美, 井出訓 (2011): ショートステイを利用する認知症高齢者が安定した暮らしを維持するための要素, 日本認知症ケア学会, 10 (1), 28-38.
黒田文 (2005): 高齢社会における「老い」の理解へむけて-高齢者の適応様式に関する考察, 社会福祉学, 46 (2), 78-87.
Christine Boden (1998) / 桧垣陽子訳 (2004): 私は誰になっていくの? アルツハイマー病者からみた世界, (8), 84-106, クリツエイツかもがわ, 京都市.

毛束忠由, 金子るり子, 松房俊憲ら (1996): 生活環境の変化が老人ホーム入所者に与えた影響-GBS尺度による痴呆群と非痴呆群の比較-, 作業療法, 15 (1), 39-47.

厚生労働省 (2003): 高齢者介護研究会報告書, 2015年高齢者介護~高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて, 32-41, 厚生労働省老健局法研.

五島シズ (2008): 愛をこめて認知症のケア (1), 33-52, 看護科学社, 東京都.

佐々木心彩, 羽生和紀, 長嶋紀一 (2004): 高齢者の施設適応度測定指標の開発, 老年社会科学, 26 (3), 289-295.

佐藤眞一 (1998): 中高年者の仕事過程余暇・社会活動の満足度尺度の作成と検討, 老年社会科学, 11.

日本老年行動科学 (2001): 適応, 井上勝也, 大川一郎編集, 高齢者の「こころ」事典, 162-163, 236-237, 中央法規, 東京都.

Dawn Brooker (2007) / 水野裕監修, 村田康子, 鈴木瑞枝, 中村裕子, 内田達二訳 (2010): パーソン・センタード・ケア, (1), 118-154, 178-181, クリエイツかもがわ, 京都市.

内閣府 (2012): 高齢社会白書, 14-16.

内閣府 (2007): 「高齢者の健康に関する意識調査」 「介護を受けたい場所」 「最期を迎えたい場所」, 高齢社会白書, 37-38.

任和子 (2008): コーピング理論, 佐藤栄子編, 事例を通じて優しく学ぶ中範囲理論入門, (3) 163-181, 265-273, 日総研グループ, 名古屋市.

藤田綾子 (2000): 高齢者と適応, (1), 7-9, 83-86, ナカニシ出版, 京都市.

藤巻尚美, 流石ゆり子, 生田貴子 (2007): 介護老人福祉施設を終の住処としている後期高齢者の現在の生活に対する思い, 老年看護学12 (1) 80-86.

正木治恵, 真田弘美 (2011): 老年看護学概論「老いを生きる」を支えるとは, 南江堂, 東京都, (1), 2-4.

丸山かおり, 高橋和代, 浅田こころ他 (2010): リロケーションダメージの軽減に馴染みの小物が与える効果について, 認知症ケア事例ジャーナル, 3 (1).

森一彦 (2003): 高齢者の環境適応と地域環境, 日本整理人類学会誌, 8 (4), 119-206.

山口幸 (2005): 認知症高齢者介護におけるグループホームのケアの効果に関する実証的検証, 社会福祉学, 100-110.

表1 KJ法の手段を使って分類したCさんの生活環境への適応に関するラベル

表札 [11個]	島 [20個]	ラベル [66個]
時間をかけて今は馴染んだ新しい住まい	時間をかけて慣れてきた	入所時は一人ほり込まれ寂しく思った 時間はかかるが、生活に慣れたら自分の家と一緒に今は慣れたから大丈夫
	自分の家と一緒に思えるようになった	自分の家と一緒に 自分の部屋は御殿と感じている 夜、眠れる 食事は美味しい 不自由はない 寂しいと思っていない
自身の老いを受けれる	年齢とともにできなくなってきた	眼鏡の置き場を忘れる (2) 長時間の会話は疲れる 同じ動作を繰り返すと記憶力がなくなる 年相応のもの忘れはある
	年齢を重ねてもできている	トイレはカテーテルの挿入でやる (排尿はカテーテルを挿入している) メガネを外しても読める 目は見えにくいですが耳は達者 年をとっても記憶力は確か
	年齢相応のこと	自分ではボケているところまでいかないと思っている 人さんが見たら言っていることがおかしいこともあるかもしれないが百歳に近いし仕方がない
自分の居場所が決められる	自分の居場所を選択し移動できる	歌につかされると向こうに出る (台所) 昼間は、居室でTVを見たり、車いすを運転して思っているところに行く
生活の知恵や判断力に基づいて対処行動がとれる	ストレス回避行動	ボケないように自分のことは自分でする お金を持つと忘れて人のせいになると怖いのもたない 人と揉めないために悪くは言うことはしない いらぬ事は話さないで必要なことを伝えれば快適に生活できる 趣味があるといふとは思うが、未だ見つかっていない
	楽しみを積極的にとりこむ	なるべくみんなとしゃべって気分転換 リビングでみんなと話をするのが一番いいことと思っている 昔の歌はうろ覚えだが歌える 歌は一人のできる 歌は気持ちが晴れる 一回で終わらずっきりする時代もののTVが好き
個人の信念・価値観を大切にしている	誇りが表れている	病気はあるけれど楽しみはある 同じことを何回も聞かれると苦痛である 人と話すのが趣味 物忘れを年のせいやと思ったらかん娘のように親孝行することは報われる 娘が袖にしたり突き放したりすることは絶対ない 人を大事にすることはすぐには報われないがいずれは自分に返ってくる
金銭管理の意識がある	お金の心配はしている	お金の心配はしている
家族が支えになっている	娘の声かけが支えになっている	娘から長生きを望んでいると声をかけてもらっている 入所することはなかなかできないと聞いている 娘からここで気楽に生活するように言われている
	娘の面会が頻回にある	孤独だけれど娘は来てくれる 娘が面倒見てくれる 娘がよくしてくれる (2) 二日に一度の面会がある
	必要なものを用意してくれる娘がいる	娘が衣服の調達をしてくれる 好きなおやつは娘が買ってきてくれる 娘が面会に来ておやつをもってきてくれるのがありがたい
	家族は離れた場所にも近い存在である	いつでも家族に会えると感じている (2)
子孫繁栄の喜びがある	孫やひ孫の成長は楽しみ	大勢の孫がいて幸せ 社会で活躍している自慢の孫がいる 孫やひ孫がかわいい盛り 孫・ひ孫が面会に来て成長する姿が楽しみ
職員のケアが適切である	自分で職員の助けが得られる	職員に用があれば呼び鈴を押す 呼び鈴を使って、必要なケアを職員に伝えられる
	職員のケアに満足している	用事が済めば職員はすぐに帰るが有り難い 花の世話をしている職員も見ている 職員が風や空気の調整を細やかにしてくれる
静かで自然を感じる環境がある	生活の場は静かである 周辺の自然を感じている	建物の音が静か 〇〇の花が咲いているのを見ている
なじみある地域への関心	地域社会とのつながりが意識できる	文化ホールができ駅前がにぎやかになっている

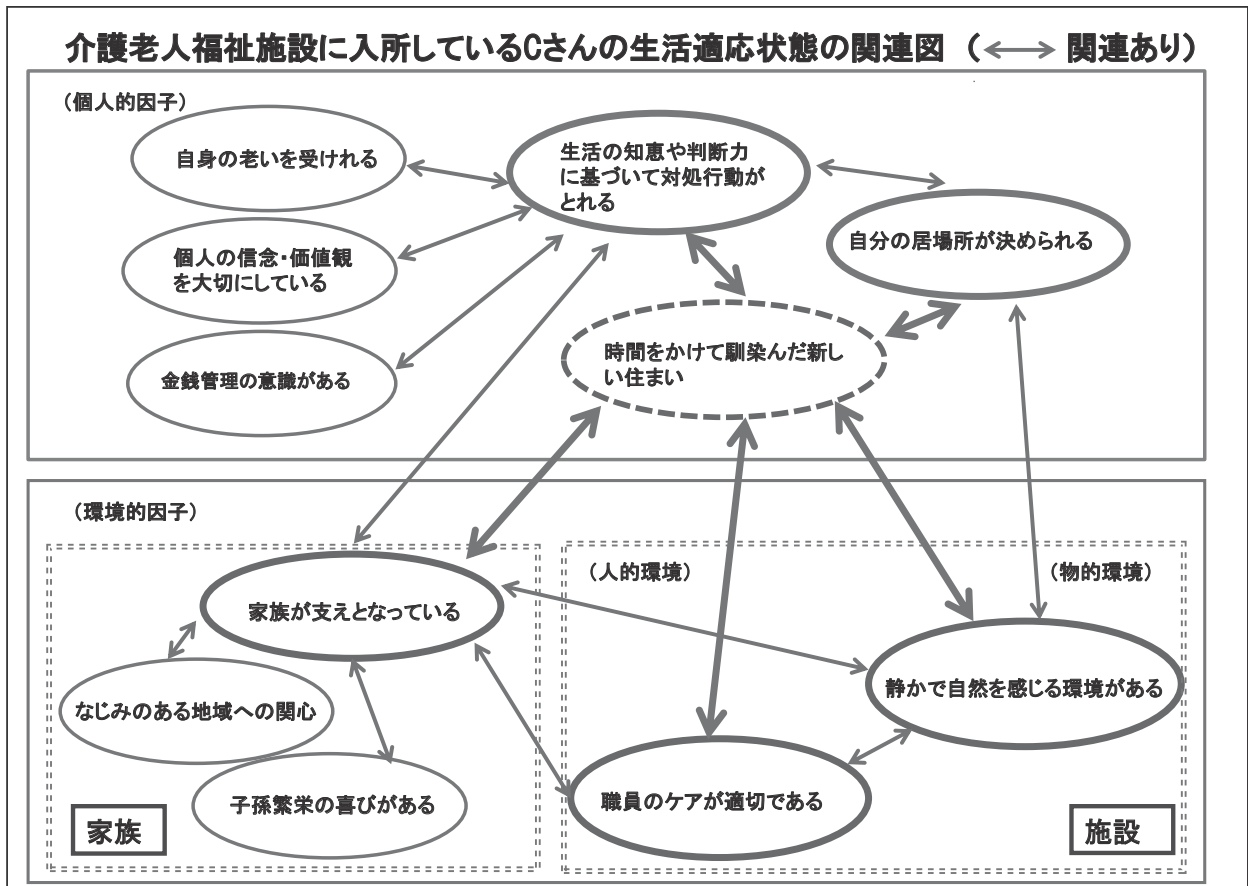


図1 介護老人福祉施設に入所しているCさんの生活適応状態の関連図